

# 総合型地域スポーツクラブの取り組み — NPO法人群大クラブキッズダンス教室を例として —

高橋 美穂子<sup>1</sup>

The Children's Dance Club at Gumma University:  
An Overview of a Successful Community Multi-purpose Sports Club  
Mihoko Takahashi

## 1 はじめに

### 1. 群大クラブの成り立ち

2002年に群馬大学を拠点とし、大学から発信する地域住民の健康でスポーツが行える生活スタイルづくり、豊かなからだと生活、豊かな社会づくりを目的として、教育学部の柳川教授を中心に「NPO健康スポーツ21」がスタートした。中心となったのは教育学部保健体育講座だが、群馬大学医学部の協力を得て、参加者の体力測定や健康調査、また高齢者を対象に生活習慣病予防のための健康プログラムを提供するなど、医科学的な側面からも、県民の健康で豊かな生活づくりをサポートしようというものである。国立大学の施設を開放し、スポーツ科学を活かしたトップレベルのコーチングを地域住民に提供するなど、大学の研究者専門家との連携によるスポーツクラブは全国でも珍しく、その可能性と活動の展開は注目を集めている。

設立当初の活動はレスリング教室と彬啓塾（ひんけいじゅく）と名付け

---

<sup>1</sup>群馬大学教育学部

た遊びの教室のみであった。2007年3月に「NPO群大クラブ」に改名し、教室もサッカー、テニス、ダンス、軽登山などを増やして、規模を拡大した。子どもから大人まで参加可能であり、それぞれの志向や技能レベルに応じて、スポーツを楽しむことができる。2013年現在はサッカー、テニス、キッズダンス、軽登山、大人のためのエクササイズクラス、少年野球、レスリング、ヨガ、卓球、体操教室、筋トレ講座、遊びの塾、など13種目20教室を開催の他、吉岡町と提携した健康推進プロジェクト、トップアスリートを地域小中学校に派遣する好循環推進プロジェクト、六合村の廃校となった小学校の指定管理など、多岐にわたって活動をおこなっている。会員は2013年現在290人で、講師は15人、補助の指導スタッフが10人の体制で運営している。筆者が群大クラブに関わるようになったのは2008年4月にキッズダンス教室の講師に着任してからである。ここでは筆者が関わったキッズダンス教室に的を絞って、活動の経緯と実践について報告したい。

## 2. キッズダンス教室

キッズダンス教室そのものは2007年に開講された。しかし講師が現役の学生のみであったため、試験期間は教室を休みにするなどの不安定な開催状況や、指導内容への保護者からの不満が募り、講師の学生が卒業する年度に筆者が引き継ぐことになった。

国立大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの大きな特徴として、大学施設や専門家の知見を地域住民に提供するというこの他に、教室の講師スタッフを経験することを通じ、教育学部の学生を育成するという教育的目標がある。しかし学生はいずれ卒業するため、場合によっては年度ごとに講師が変わることもあり得る。講師を学生のみに頼る状況であれば、長期的なビジョンを持ち、指導プログラムを組んで子どもを指導することは難しい。専門的な知識と経験を有する講師が常在して指導の軸となり、学生はそのサポートをしながら自らも指導法を学んでいくという体制が好ましい。この体制が整えられるかどうか、大学の総合型スポーツク

ラブの本領を發揮できるか否かという重要な点である。

2008年に新体制となったキッズダンス教室は、その年のうちに第1回発表会を群馬大学敷地内にあるミュージズホールで開催し、翌年には筆者がコーチを務める群馬大学ダンス部の定期公演を鑑賞するなど、大学を拠点とするスポーツクラブならではの交流的な活動を積極的におこなった。

2012年には地域で開催されるダンスコンテストにも参加し、発表会も2回目からは学外の大きな劇場にうつすなど、大学学内だけでなく、外へ出てゆく活動も始めつつある。

ヒップホップに代表されるストリート系のダンスは、メディアを通じて目にする機会も多く、全国的に空前のブームを迎えている。また2012年に文科省によって中学校体育において、ダンスの男女教習必修化が導入されたことがそれに拍車をかけ、ダンス教室への入会希望者が増えている。群馬県前橋市においてもダンス教室は増加傾向にあり、ダンスをしたいという欲求、需要が一層高まっていることが分かる。ダンスは特別な道具や設備を必要とせず、身体さえあればどこでも出来るものである。また音楽に合わせて踊り、心を開放する運動であるという点では、ストレスフルな現代社会において、子どもの心身の健やかな成長を促すのにふさわしい運動であるといえる。運動する子どもと運動しない子どもとの二極化が問題となっている現代において、身体さえあれば誰でも楽しくできるダンスは、手軽に始められる運動として最適である。できるだけ多くの子どもに体験してもらうこと、運動の習慣を身につけ、生涯学習に繋がる契機としてダンス学習の場を提供することは、地域住民の健康への意識を高め、結果として地域の健康促進を向上させるという点で大きな意義がある。

このような観点から群大クラブでは、ダンスの専門家を育成する場ではなく、ダンスを通して子どもの心身の健やかな成長を促すこと、地域住民の健康への意識を高めること、また地域のコミュニティを形成しようような情報発信、交換の場となることを目指して活動している。

筆者がキッズダンス教室の講師に着任してから今年で6年目を迎える。

本稿では、これまでのキッズダンス教室の活動をまとめ、その活動を振り返り、現状を把握して今後の課題が何かを整理する。また受講児童とその保護者へのアンケート調査の結果、指導の学生スタッフとの協議内容を踏まえて、今後の発展、よりよい教室運営のための課題と解決の方法を明らかにすることを目的とする。

## II キッズダンス教室の概要

### 1. 日程および場所

2007年から2012年までは、毎週土曜日の午前9時から10時半までの一クラスのみで開催であった。受講児童については5歳から14歳までの約40人が在籍しており、その全員を一斉に指導していた。1時間半の時間で、幅広い年齢層の40人もの子どもに、ゆきとどいた指導内容を提供するのは困難であった。筆者の他に学生アシスタントが補助で1人つき、指導をサポートしたものの、イベントや発表会前の練習では、時間の不足を公民館やスポーツセンターを借りる等して補った。場所は群馬大学教育学部の第二体育館の半面を借り、周囲を大学生の体操部や空手部が練習する中での活動であった。場所が広く、大きな全面鏡が使えるなどの利点もある一方で、休憩時間に練習中の体操部の学生と衝突する恐れがあったり、水を飲みに行くには練習中のバトミントン部のコートを通らなければならないなど、安全確保の面での不安があった。また大学の行事の際には利用できないなど、活動が安定しておこなえないという難点もあり、活動場所の確保は、群大クラブキッズダンス教室の大きな課題であった。

2013年には前橋自動車教習所より、敷地内にある合宿施設の一角をダンススタジオとして提供を受けた。前橋自動車教習所は群馬大学にほぼ隣接しており、大学正面入り口から徒歩5分の近さのところにある。その施設をダンススタジオとして提供してもらう代わりに、前橋自動車教習所職員健康調査と健康促進アドバイザーとしての役割を引き受け、健康促進のためのダンスエクササイズクラスを新たに設けることとなった。

4月には前橋教習所内にキッズダンスの拠点を移し、定期的に活動することが可能となった。場所はそれまで使っていた体育館より狭く、以前と同じような全員の斉指導は難しくなり、年齢別に土曜日の9時から10時を幼稚園から1年生、10時15分から11時15分までを2年生から4年生、11時30分から12時30分までを5～6年生と3クラスに分け、それぞれの活動時間を1時間ずつとした。

活動の時間は短くなったものの、体育館の時のように周囲に部活動をする大学生もなく、年齢別の少人数クラスになったことで、指導する側も受講児童も活動に専念できるようになった。そうした中でただ楽しむだけでなくスキルを高め、地域のコンテストに挑戦したいなどの声が受講児童の中からあがり、土曜日だけでなく、水曜日の夜7時から9時にもコンテスト挑戦のためのクラスを開くことになった。

## 2. 実施体制

各クラスとも、講師1名と学生の指導補助スタッフが1名から2名、および1名の事務局スタッフによる体制で活動をおこなった。講師は群馬大学のダンス部コーチである筆者がつとめ、指導補助の学生スタッフには群馬大学ダンス部の部員があたった。学生スタッフには低学年のクラス、中学年のクラス、高学年のクラスとそれぞれ中心となって教える担当者を決め、講師は全体を通して技術的な指導、振付の他、指導補助の学生スタッフへの助言もおこなった。

姉妹で受講していて、年齢別のクラスになったことで待ち時間ができてしまう場合、その間に勉強を教える「寺子屋」も同時に希望制で開催し、これは事務局スタッフが担当した。

発表会やイベント参加の前後には、指導補助のスタッフだけでは足りず、群馬大学ダンス部の部員が総動員で音響や受付、アナウンスなどを分担した。また発表会前には、卒業した学生スタッフも不定期にはあるが、時間を作って指導の補助に入った。事務局スタッフは、会費の徴収、会員へ

の事務連絡、資料作成、入会希望の保護者への説明などを担当した。

### 3. キッズダンス教室の内容

#### (1) 日常の練習

キッズダンス教室では1時間の練習時間のうち、30分を基礎練習とストレッチ、30分をダンス作品の振付、練習にあてている。1時間という短い時間では複雑なステップや高度な技術を身につけるのは難しく、それよりも伸び伸びとした身体づくりを第一に考えて指導をおこなった。身体全体を使って思いきり動けること、運動的達成感を得られること、音楽のリズムに乗って、友達と呼吸を合わせて、心を開放して運動し、ダンスの楽しさを知ってもらうことなどを目標として指導プログラムを組んだ。そのためにはストレッチに使用する音楽も明るくノリの良い曲を選び、1時間で習得が可能な難易度の振付をする必要がある。具体的な指導内容については学生スタッフと協議を重ね、振付を考えた。

#### (2) 年間の大きな行事

##### (2)ー1 発表会

キッズダンス教室において、1年を通してもっとも大きな行事は10月の発表会である。発表会では約40人の生徒がそれぞれ2作品を練習して発表するため、全体で15作品ほどの振付が必要になる。学生スタッフは自分の担当クラス全員で踊る群舞作品と、少人数による作品の2作品の振付をそれぞれ担当する。舞台上で発表させるまで、振付だけでなく、衣装制作や照明効果まで責任を持って受け持つ。生徒の個性やスキル、年齢を考慮した作品づくりはもちろんだが、作品を助ける衣装の制作、保護者とのやりとりなどもこなさねばならず、この発表会をやりきることが生徒だけでなく、学生スタッフ自身をも大きく成長させる契機となっている。

また、学生同士もそれぞれの作品に触発され、学び合い、創作力を高めている。発表会当日は指導補助の学生だけではなく、群馬大学ダンス部の

学生全員が音響、アナウンス、受付、舞台への誘導、化粧などを手伝うスタッフとして関わる。ダンス部の学生にとっても、自分たちが踊らない舞台運営に関わることで、舞台づくりの全貌と流れが把握できる良き学びの場となる。普段はダンサーとして発表する側にいるダンス部の学生が、発表を支える側に徹して舞台に関われることは殆どない。キッズダンスの発表会を成功させることは、学生の側にとっても多くを学び、大きな達成感を得て、自分たちの活動の糧とする絶好の機会であると言える。

## (2)ー2 合宿

キッズダンス教室で次に大きなイベントは、夏休み中に実施する合宿である。この夏合宿は筆者が講師に就任してから3年目の2010年に始められた。最初の2010年には、群大クラブが指定管理をしている六合村の廃校となった小学校を宿泊施設として利用したが、翌年の3月に起きた東日本大震災を受け、その後はすぐに保護者と連絡が取れる近くのスポーツセンターに場所を変えた。

通常練習では年齢別クラスで活動をしているため、夏合宿の合同練習は全員が顔を合わせる数少ない機会となる。地域のスポーツセンターとその合宿施設を利用し、10月にある発表会のオープニングとエンディングの作品を2日間で集中して振りつける。真夏の暑い時期でもあり、年齢の低い子どもは集中を持続させるのが困難なため、合宿中はこの2曲に絞って午前、午後と練習をする。夕飯は最初の2年はバーベキューをしたが、3年目は初めての試みとして縦割りの班に分かれ、保護者協力のもとに調理実習をおこない、自分たちで作ったものを食べることにした。園児から中学生までが縦割りで協力し、できることを分担して調理する中で、普段の練習時には体験できない年代を超えた交流が生まれ、大変好評であった。保護者間からも「他のお子さんと交流する機会がなかったので、楽しかった」という声が多く聞かれた。

## (2)ー3 外部での発表

毎年1月の最終土曜日におこなわれる群馬県女子体育連盟主催のダンス

発表会へ参加する他、2011年5月には上毛ホームダンスコンテストに初めて参加し、その後2013年1月には上毛新聞社杯ダンスコンテスト、2月に高崎前橋ダンスコンテスト、7月には埼玉舞踊協会主催全国舞踊コンクールに挑戦した。特に高崎前橋ダンスコンテストには指導補助の学生スタッフも共に挑戦し、同コンテスト最高賞の菊地隆賞を受賞した。指導者と生徒が共に同じコンテストで競い合い、お互いに高め合う初めての経験となった。

#### (2)ー4 ダンス部定期公演の鑑賞

3月末には群馬大学ダンス部の定期公演が前橋市民文化会館か高崎文化会館のどちらかで開催される。子どもたちが日常的に指導を受ける学生スタッフはもちろん、発表会やコンテストなどの外部発表の際に、スタッフとしての関わりを持つダンス部の学生の作品を、親近感を持って鑑賞することができる。キッズダンス教室では、保護者と共にできるだけ鑑賞するように呼びかけている。舞台上で上演される作品を生で味わい、感じることは、自分が修練する過程では得られない踊り手と観る側のダイレクトなコミュニケーションを体感することであり、踊るだけでなく、観ることによって学ぶ絶好の機会である。鑑賞後に子どもたちに感想を聞くと、「～の様な踊りを踊れるようになりたい」、「～の作品が好きだった」から、「将来群馬大学ダンス部に入りたい」のような肯定的な意見が多く聞かれた。ダンス部の学生も、子ども達に観られることで作品発表に気持ちが入り、相互にいい影響を与え合っていると見える。

### Ⅲ. 大学ダンス部との連携および学生スタッフの育成

大学が拠点となる地域貢献型の総合スポーツクラブにおいては、その施設の開放と、大学の専門家による知見を活かした活動を地域住民に提供できることが大きな利点である。群大クラブでは、ここにさらに教育学部の学生を指導補助のスタッフとして採用することにより、学生自身の指導スキルを高める学びの場としての効果を期待した。また、学生と地域との交



流を促し、相互に学びあい、高め合う好循環のプロジェクトとなることを目指した。サッカー教室にはサッカー部の学生、レスリング教室にはレスリング部の学生がそれぞれ指導補助としてついた。キッズダンス教室には、筆者がコーチを務める群馬大学ダンス部の学生が指導補助で2名ついた。キッズダンス教室は幼稚園児から中学生までが在籍していて年齢層に幅があること、専門家の育成ではなく、楽しさを知ってもらうことが第一であること、地域のコミュニティ形成のための活動拠点となることなどの条件を踏まえて、学生スタッフに指導方法の研修をおこなった。学生スタッフについては、仕事として任されているという意識が低く、試験前は活動を休みにしたり、時間に遅刻したり、活動中の子どもの安全確保が不徹底などの問題点が、筆者が着任するまでの以前の活動から指摘されていた。社会経験の乏しい学生には、仕事に対するこのような基本的な心構えから教える必要がある。これらの点も含め改善のための研修をおこない、仕事としての意識を学生に高めさせることは重要であると考える。指導の内容は以下の表の通りである。

表1 [学生スタッフへの指導内容]

|           | 学生への指導内容   | 講師の留意点   |
|-----------|--|--|
| 教室の運営について | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教室開始時間より前に来て、危険物を取り除き、環境を整える。</li> <li>・(幼児クラスは特に) 休憩時間にも目を離さず、持ち場を離れない</li> <li>・担当のクラスは試験前でも極力休まない。どうしても都合のつかない場合は代講を立てるなど、事前連絡を密にする。</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が環境を整えた後に全体をチェックし、教室の安全を確保する</li> <li>・月の始めに学生のスケジュールを確認しておく</li> <li>・保護者への説明は学生ではなく、講師がおこなう</li> </ul>               |
| 指導方法について  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶を率先しておこない挨拶の習慣をつけさせる</li> <li>・大きな声でゆっくり話し、説明には簡易な言葉を用いる</li> <li>・振りは左右対称の振り、繰り返しを用いる</li> <li>・言葉だけでなくやってみせる</li> <li>・できているところを多く褒める</li> <li>・イメージをかきたてるような比喩表現を多く使い、心と体が一体化するように導く</li> <li>・休憩はこまめにとり、水分補給を促す</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全クラスに立ち会い、生徒の立場に立って、分かりにくい説明にはそれを指摘する。</li> <li>・説明の時には音楽を止めて生徒の集中を促すようにする。</li> <li>・子どもに適した運動であるかどうかをチェックする</li> </ul> |
| 指導内容について  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・手足がよく伸びているかに着目し、声をかける</li> <li>・動きの高低の差がはっきり分かるように動く</li> <li>・運動的な達成感が得られるよう、適度な運動量になるように振りを調整する</li> <li>・細かい振りではなく、子どもらしさを損なわないような全身を使った大きな動きを振りつける</li> <li>・感じていることを素直に表現できるように言葉掛けをする</li> </ul>                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の指導と生徒の達成度を見て、できていない子どもには時々言葉掛けをする。</li> <li>・振付の進度が速すぎないか子どもの様子を見て調整を促す。</li> </ul>                                   |

学生スタッフが指導の成果を確認できる一番の機会は発表会である。発表会の指導を始める時期には指導指針を確認する研修会を、発表会後には反省会を開き、会の全体を振り返って指導や作品の振付が適切であったかどうかを検討した。衣装、音楽、構成、振付作品のテーマ選択が対象年齢にふさわしいものであったかなどの作品についての反省から、指導の際の言葉掛け、目標達成度などの指導内容について、また、舞台準備や当日の流れなどの運営面についてなど、検討する点は多岐にわたった。

反省会でもっとも反省すべき点としてあがったのは、振りが細かすぎて

全身表現の気持ちよさや、子どもらしさが消されているということであった。学生は自分の見聞きする情報をもとに振付を考案することが多く、対象となる子どもの心身の発達段階や、その年齢の子どもに求められる表現を無視しがちな傾向がある。難易度の高い振りをこなすよりも、子どもらしく伸び伸びとした表現を損なわず、全身を使って踊れるように導くという目標を反省会の中で再度確認した。

以上のように、教室は学生スタッフが自分の指導の成果を確認できる発表会などの機会を持ち、そこへ向けて1年単位で日々の指導プログラムを錬成する方法で進めている。知識の集積だけでなく、目の前の子ども自身を見て個性を引き出す、表現力を高めさせるという、血肉の通った指導方法や指導スキルを高めることを目指した。また指導の中では、分かりやすい説明の仕方や、子どもの積極性を引き出す言葉かけを身につけられるように心がけた。

## IV. 生徒および保護者へのアンケート調査

### 1. 方法

受講している生徒40人とその保護者を対象に、教室の内容についてのアンケート調査を実施した。

設問は15問は受講している生徒自身が答え、残りの2問はその保護者が答えるもので、全部で17問用意した。

調査内容は年齢、性別、名前に始まり、群大クラブキッズダンス教室に入会するきっかけ、入会するまでの運動経験の有無などを聞いた。次に、教室を楽しんでいるか、続けたいか、続けるとすれば何歳くらいまで続けたいかを聞いた。その後指導者の説明について、学生スタッフの説明についてを「わかりやすい」から「とてもわかりにくい」までの5件法にて回答させた。さらに、活動環境の安全性について、環境、施設についての満足度を5件法で回答させた。また、中学校への進学を機に部活との兼ね合いで、教室への参加をどうするかということについても「続けたい」

「やめて部活に専念する」「わからない」の3つの選択肢により回答させた。

保護者へは、月謝および教室の活動にかかる諸経費の金額が適当かどうかどうかという件を聞き、最後に生徒、保護者それぞれに教室に対する意見、要望などを自由記述によって回答させた。

## 2. 結果

回答は合計34名から得られ、回答率は89%であった。

そのうち76%の受講児童が、入会するまでに運動・スポーツに熱心に取り組んだ経験がないと答え、キッズダンス教室での活動が運動・スポーツの初めての経験になっていることが明らかになった。また今後もダンスを続けて行きたいかという問いには全員が「はい」と回答した。

続けるとすれば何歳くらいまでを目安にしているかという問いに対しては、「12歳まで」「15歳まで」といった中学校進学、高校進学をそれぞれ活動の区切りとして考えているものと、「ずっと」「50歳くらいまで」のような、生涯にわたって活動したいという回答がおおよそ半々の割合で得られた。群大クラブのキッズダンス教室に入会したきっかけを問う質問には「友人の紹介」という回答が20名、「ダンスを習いたかったから」が8名、「発表会を見て」「体験入会してみた」が2名ずつ、「すごいことをやりたかったから」「楽しそうだったから」がそれぞれ1名であった。

教室の内容についての質問には、「とても楽しい」と回答した児童は91%、「まあまあ楽しい」と答えた児童は9%で、活動に参加することで楽しさを感じることができていると分かった。講師の指導については「分かりやすい」が85%「まあまあ分かりやすい」が15%、大学生スタッフの指導については「分かりやすい」76%「まあまあ分かりやすい」24%で、どちらも高い満足度が得られていることが分かる。

教室の施設環境・安全については「とても満足」と答えた児童が26%「まあまあ満足」が47%、「とても安全」は38%「まあまあ安全」が50%、とそれぞれ過半数の児童が満足している一方で、「少し不満」「少し危ない」と

の回答もそれぞれ1%程度得られた。

中学校にダンス部があるかという質問には「ある」と回答した児童は0で、「ない」と回答した児童が91%、「わからない」は9%であった。

更に中学校進学後も活動を続けるかどうかについては「続けたい」と「分からない」という回答が共に同じで44%、「やめる」と回答した児童が12%であった。

教室の活動で楽しみにしていることは何かという質問（複数回答可）については、「発表会」という回答が27名と1番多く、次いで「合宿」が22名、「お祭りなどのイベントへの参加」が15名、「コンテスト参加」が10名、「全国コンクールへの挑戦」「群大ダンス部公演の鑑賞」がそれぞれ5名、「県の女子体育連盟主催発表会への参加」が4名であった。

また、キッズダンス教室の月謝及び活動にかかる諸経費を高いと感じるか、安いと感じるかという保護者への質問には「安い」と答えた保護者が59%、「どちらでもない」という回答が41%であった。

アンケートの最後にはキッズダンス教室に対する感想や意見・要望を受講児童、保護者それぞれに自由記述で回答してもらった。受講児童からの感想は「合宿が楽しかった」「体が柔らかくなって嬉しい」「ダンスを友達と踊れて楽しい」「できなかったことができるようになって嬉しい」など活動の楽しさを表すものが多くあった。意見、要望としては「夜間の出入りに裏口にセンサーライトをつけて欲しい」「もう少し広い活動場所が欲しい」など活動環境の安全性に関わるものから、「もっと踊りたい」「練習時間を長くしたい」「コンテストに出たい」「賞をとりたい」「練習日を増やして欲しい」などの活動への意欲を示すもの、「中学生になっても続けたい」「中学生クラスを作ってほしい」など、中学生クラスを増設し、長期にわたって活動を続けたいという希望が大多数であった。

保護者の記述からは、指導、月謝への満足などの他、活動回数の増加と中学生クラスを増設を望む声が多く見られた。特に中学で運動部に入るか、キッズダンス教室の活動を継続するかという選択に迫られている高学年の

児童の保護者からは、部活に代わるような頻度でクラスを開講して欲しいという要望があった。また、NPOならではの地域交流を深めるために、保護者間の情報交換や意見交換の場をもっと作りたい、新聞を発行してもらって活動の状況を知りたいなどの具体的な要望の他、衣装制作の手伝いを申し出るなど、保護者にも積極的に子どもたちの活動に関わりたいという意欲が見られた。

## V. 考察

アンケート調査の結果を見ると、全体的な回答の傾向から、群大クラブキッズダンス教室は受講児童にとって満足度の高い内容を提供できているということが分かった。その要因としては、NPO法人ならではの活動実施体制、大学との連携、年間を通した豊かな活動プログラム、中学校体育授業へのダンスの男女共習必修化の導入などを契機としたニーズ等が考えられる。

現時点においては、専門家の知見を活かした活動を地域住民に提供する、大学施設を開放して地域住民に活用してもらい、活動を通して地域コミュニティの形成を促進するといった、大学を拠点とした地域貢献型の総合スポーツクラブとしての役割を十分に果たしていると言える。

### 1. 実施体制について

アンケート調査の結果をみると、他のダンス教室と異なる点として、低年齢から入会可能だということ、月謝が安いということ、体験入会が4回まで無料で受けられることなどをあげている人が多かった。

活動にかかる諸経費の面からいうと、群大クラブキッズダンス教室は、月謝を週1回の活動につき1人3000円に設定しており、それ以上は1回のレッスンを500円に設定してチケット制を実施している。活動が営利目的ではないということ、また、地域住民の方たちにスポーツを楽しむ機会をできるだけ多く提供したいというクラブの理念から、入会希望者にも体験受

講を4回まで無料で提供している。発表会前には不定期に活動回数を増やしているが、その分は特に加算していない。たとえば発表会のある10月の練習日は通常よりも8日多い12日だが、月謝は平時と同じ3000円になる。

また、年に一度開催する発表会への参加費は1万円で抑え、その参加費のみで衣装も揃え、一人につき3～4作品踊れるように工夫している。これは、指導や衣装制作に学生スタッフの協力を得られること、講師含め運営スタッフへの謝金等を安く抑え、経費節減できること、活動場所が確保できていること、照明や音響などは群馬大学のダンス部、演劇部などに依頼できることなどによって可能になっている。大学の豊富な人材を活用し、学生の指導スキルも高めながら、地域住民の方たちに安価で活動を提供できるという、大学による地域貢献型のスポーツクラブならではの特性が活かされていると言える。

活動の回数については、現在土曜日は年齢別に3クラス、水曜日は4年生以上でコンテスト参加を目指す1クラスで、活動の機会は多くても週に2回である。これは指導の学生スタッフの平日の確保が難しいこと、講師が他に仕事を持っていて空き時間に限りがあることなどによる。講師が他に収入源となる仕事を持っていることが、群大クラブの活動諸経費を安価に抑えられる条件でもある反面、群大クラブだけに時間を割くことができないというジレンマでもある。

## 2. 教室の内容について

群大クラブキッズダンス教室では、ストリートダンスに限らず、コンテンポラリーや民族舞踊に類するものなど、色々なダンスにチャレンジさせたいと考えており、すべての基本となるバレエの基礎を取り入れてストレッチをおこない、大きく伸びやかな体づくりを心がけている。ダンスコンテストへの参加も、オールジャンルの部門からヒップホップ部門、コンテンポラリー部門など、ジャンルに拘らずに挑戦している。

感受性の豊かで多感な子ども時代に、いろいろな音楽に触れ、リズムに

合わせて思い切り動くことは、心身の健やかな発達に大きな影響を与える。アンケートの回答にも「いろんな踊りを踊れることが楽しい」「新しい振付けが楽しみ」と、様々なジャンルの踊りにチャレンジすることを楽しみにしている様子が伺えた。

また「バック転に挑戦したい」「凄いことをやりたい」などアクロバティックな動きを身につけたいという意見もあり、体操的な運動スキルの向上を望む声もあった。学校の体育の授業に成果が発揮できることを望む声、また、「体力がついた」「走るのが速くなった」「マット運動が得意になった」などの成果が出たという実感に基づいた感想もみられた。キッズダンス教室では、こうしたアクロバットにも少しずつ挑戦できるようにブリッジから始め、前方展開、ロンダートなどを練習している。ダンス作品の中にこうした大きな技を入れることで、作品全体を盛り上げる効果と、アクロバットができるようになった達成感で自信がついて表現が大きくなるという相乗効果がみられる。

### 3. 活動環境について

アンケートの結果をみると、「場所が狭い」「もう少し広いところで踊りたい」という活動場所の狭さに対する不満、またその狭さによる「教室内で子どもの踊りを見学していることができなくなった」「他のお母さんたちとの交流の機会が激減した」などの保護者からの不満もみられた。大学の体育館から教習所内のスタジオに活動場所を移し、安全面の確保と、大学行事に左右されない安定した活動体制を得ることができたが、広さはそれまでの半分ほどになった。そこで、40人を3クラスに分けて1時間ずつ指導することにより、少人数制にして指導内容の更なる充実を図ったのだが、保護者が見学するスペースまでは十分に確保できないのが現実である。これは今後入会希望者が増えてゆくとともに、クラスを増設して対応するのか、活動場所自体に再考の余地があるのか検討すべき課題となっている。しかし今回は前橋自動車教習所が、群大クラブが教習所職員の健康調査、健康



促進のための運動プログラムを提供するという条件のもとに、空きスペースとなっていた合宿所の1画のダンススタジオとしての利用を申し出てくれたが、これは特殊な例で、多くのダンス関係者は場所の確保にもっとも苦勞している。より広く、安全で快適な活動場所の確保を求めつつも、今ある活動場所をうまく活用するための工夫を重ねることが必要であると考える。

#### 4. 大学ダンス部との連携について

受講児童、保護者の双方から「もっと練習を増やして欲しい」「部活の代わりにしたい」という意見が多くみられ、中には「月謝を高くしても良いので、指導者を増やして欲しい」という保護者からの意見もあった。しかし、群大クラブは大学ダンス部の協力が得られなければ、キッズダンス教室の体制を維持するのは不可能である。大学のダンス部に入部する学生がいて初めて、そこから補助の指導スタッフを確保することができる。大学を拠点とする総合型スポーツクラブの教室開催には、施設だけでなく、学生の協力が必須条件なのである。その点で、教室の規模に合わせて講師スタッフの増減をおこなえる民間のスポーツクラブとは大きく異なる。また学生も、教室での経験を経て指導スキルを高めてゆく成長の途にある。学生が教室開催のための補助的役割を担うこと、そのことを通して学生を育成すること、の両方が活動の中でうまく循環してゆくことが、群大クラブキッズダンス教室を運営していく上で重要となっている。

アンケートの結果からは「身近なお姉さん先生の良いお手本が見られる」「お姉さん先生が優しい」「群大ダンス部の公演が楽しみ」などの、指導補助の学生に親しみを感じている様子がうかがえる。「大きくなったら群大ダンス部に入りたい」などの意見もあった。また、学生もキッズダンス教室の受講児童も、それぞれの作品でコンテストに出て競う機会があり、同コンテストで学生の作品が1位を受賞するなど、身近なところに目標とする対象があり、学べるというのも大きな特徴である。学生スタッフの指導を

受けて生徒や保護者が親しみを感じ、群大ダンス部の活動を応援するようになり、また学生も指導した生徒の成長を見て達成感を得るといった好ましい循環が生まれている。

## 5. 今後の課題

今回受講児童とその保護者にアンケート調査をおこない、得られた回答からは、活動回数の増加やクラスの増設を願う意見がもっとも多く見られた。特に受講児童にとっては中学校への入学が、活動を続けるかどうかというひとつの区切りとなっているようである。前橋市の周辺地域の中学校にはダンス部がなく、ダンスを続けたくても不可能である。他の運動部に入るならば、キッズダンス教室への参加は難しくなる。小学校高学年の児童からは「部活の代わりになるくらいの頻度で教室を開催して欲しい」という声があった。また保護者からは「中学校にダンス部の新設を要請するので、コーチとして中学に指導に来て欲しい」との声や、「教室を週3回にできるなら、文化部に入部させてこちらに通いたい」との意見もあった。キッズダンス教室はこれまで小学生までを対象に教室を開催しており、中学校への進学を機に卒業するという形であったが、中学生になっても続けたいとの声が高まりつつあり、中学生クラスの増設は喫緊の課題となっている。今現在は高学年のクラスに中学1年生が3人参加しているが、今後中学生の参加希望者は益々増えると思われる。教室の拡大、クラスの増設には、学生の指導補助スタッフの協力が不可欠であり、年次とともに卒業してゆく学生スタッフを、安定して一定数確保し続けられるかは大きな課題である。また、近隣の幼稚園から出張指導の依頼も来始めている。こういった依頼をどのように受けるかなどの実施体制の見直しも迫られている。講師および指導補助の学生スタッフへの負担の偏りが大きくなるないように、活動を展開させてゆくには、保護者の協力を求める必要がある。たとえば保護者会を立ち上げ、保護者間の連絡を密に取り合い、合宿や発表会などの大きな行事の際には手伝うなど、群大クラブ、群大ダン

ス部と保護者の3者連携で運営してゆくことが望ましい。保護者との意見交換の場を積極的に作り、運営、実施体制について現況を理解してもらうことが重要であると考え。

## VI. まとめ

2008年に筆者が引き継ぎ、新体制となった群大クラブキッズダンス教室のこれまでの活動について、その概要をまとめ、受講児童と保護者を対象としたアンケート調査の結果をもとに、現状を把握し、課題を整理した。

受講児童のほとんどがキッズダンス教室の活動内容に満足していることが分かった。年間を通じての発表会、合宿、などの大きな行事が活動のメリハリをつけており、コンテストへの挑戦なども活動への意欲をさらに高める動機付けとなったと思われる。また、群大ダンス部との連携もうまく機能したと言える。指導補助の学生スタッフと受講児童、保護者との交流を深め、学生自身の指導力向上にも大きく貢献する場となった。

今後、活動をさらに発展させてゆくには、教室の規模の拡大が必須である。特に中学生のクラスを増設するかどうかは、検討すべき大きな課題である。中学校での部活動に、自分のやりたい種目のスポーツがない場合、民間の総合型スポーツクラブがそれを補うのは、これからの地域総合型スポーツクラブに求められる役割なのではないか。とりわけ大学の専門家の知識や知見を活かしたスポーツクラブは、地域の小中学校の体育活動を補助する働きが充分にできる。学校の部活動、体育の授業などの補助的な役割を担いながら、地域住民に広く開かれた運動の機会を提供する重要な拠点となり得る。これは大学を拠点とした総合型地域スポーツクラブの理念とも合致する。これまでの活動をもとに、学生の育成と受講児童の育成の両方が効果的に循環し、地域との交流が深まるような活動のあり方を模索しつつ、地域学校との連携など新たな可能性についても追求してゆきたい。

## 参考文献

- (1) 高橋仁美・来田宣幸・坂井智明・竹田正樹（2009） 地域と大学が連携した総合型地域スポーツクラブとしてのチアリーディング教室の取り組み 同志社スポーツ健康科学(1), p79-91
- (2) 堺賢司（2006） 総合型地域スポーツクラブの必要性 愛媛大学教育学部保健体育論集 5号, p41-45
- (3) 谷口勇一・内倉康二（2010） 住民主導を意図した総合型地域スポーツクラブ育成事業における「揺らぎ」の意味と構造 大分大学教育福祉科学部研究紀要32(2), p201-213
- (4) 松田雅彦（2012） 「新しい公共」とスポーツ 人間福祉学研究 5(1), p51-59
- (5) 清雲栄純 総合型地域スポーツクラブの調査研究(1) 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要26号, p1-13
- (6) 清雲栄純 総合型地域スポーツクラブの調査研究(2) 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要27号, p47-64
- (7) 内藤正和（2007） 総合型地域スポーツクラブのNPO法人化に関する研究 愛知学院大学論集 心身科学部紀要 2, p9-18
- (8) 村田真一（2008） 総合型地域スポーツクラブにおける「運営参加」に関する比較事例研究 九州共立大学スポーツ学部研究紀要 2, p19-31
- (9) 財団法人日本体育協会 総合型クラブ創設ガイド